勝部家庭園について

庭園文化研究分科会　宇野 真一

1.　出雲流庭園

日本庭園では石組や池泉によって神仙思想、蓬莱思想、極楽浄土、深山幽谷、名所（縮景）などが表現される。大袈裟にいえば理想世界を造り出そうとする試みであり、長寿や子孫繁栄の願いを込めて鶴亀石や陰陽石が置かれることも多い。石組は庭園デザインの要となる存在である。

しかし、出雲流庭園は石組の存在感が希薄で、敷砂が水を表現することもない。ある意味、伝統的な作庭手法からは外れた庭である。園路に変化を持たせる目的で短冊石を使うことはあるが、巨大な短冊石が座敷正面に置かれている庭は出雲でしか見られない。茶室の有無に関係なく蹲踞が置かれているのも出雲流の特徴で、総じて露地庭（茶庭）の趣が強い。

このような庭を出雲流庭園と命名したのは小口・戸田両氏で、そのいきさつが著書「出雲流庭園―歴史と造形」に書かれている。玄丹流庭園の調査に島根を訪れ独自の作庭様式を確認できたが、当地では玄丹流という言葉をほとんど耳にしなかった。沢玄丹は実在が確認できないこともあり玄丹流を出雲流に改めたとのことである。

出雲流に特徴的な作庭手法は有澤山荘・菅田庵がルーツとされる。確かに京風とは異なる飛石の据え方や手水鉢のデザインなど菅田庵を手本にしたと思われる庭は松江や出雲に多い。しかし、斐川平野を中心に拡がりを見せる出雲流庭園は定型化した地割（平面プラン）も特徴のひとつであり、これは菅田庵に由来するものではない。

図 1. 菅田庵（向月亭）の延段

図 2. 菅田庵（御風呂屋）の手水鉢

2.　出雲流庭園の分類

菅田庵が造られてから 230 年近く経つ。この間の社会変動は激しく庭園オーナーの顔ぶれも様変わりしている。作庭手法の共通性に着目して出雲流庭園と総称されるが、すべてが同じように造られた庭でもない。私は出雲流庭園を３区分して捉えている。

表１．出雲流庭園の分類（私案）

分類	プレ出雲流	出雲流典型	出雲流一般
オーナー	本陣.寺社など	豪農	一般農家
特徴	庭園の構成・印象はそれぞれ異なるが、作庭手法に部分的な共通点が見られる	敷地南西・L 字型で広大な庭、巨大な短冊石や駕籠石が印象的だが、石組は控えめ	敷地の南西または南側に設けられる、共通性が極めて高く、滝石組や巨大な立石がある
作庭時期	18 世紀末～明治初期？ 約 100 年	明治 30 年代～戦前 約 50 年	戦後～（ピークは高度経済成長期からバブル期） 約 80 年

菅田庵に始まり明治初期までに造られた庭のうち、後世の出雲流に影響を与えたと考えられる庭をプレ出雲流とした。プレ出雲流には玄丹流庭園や本陣の庭の多くが含まれ、同時期に造られていても出雲流との類似性が少ない木幡山荘庭園や一畑薬師書院庭園などは含まない。

次いで江角家庭園（出雲文化伝承館、原鹿豪農屋敷）に代表される短冊石・駕籠石・天水が印象的な庭を出雲流典型とした。これ以降の出雲流庭園は定型化した地割を持つ。最後が斐川平野に多く存在する一般農家の庭で、これを出雲流一般とした。

図 3. 木佐家庭園（平田本陣記念館）

プレ出雲流

図 4. 江角家庭園（出雲文化伝承館）

出雲流典型

3.　勝部家庭園の謎

うまく分類できない庭が勝部家庭園である。「出雲流庭園－歴史と造形」が紹介している勝部家の庭は出雲流典型の特徴を備えているが、勝部家に残されているエピソードと本に掲載されている庭の様子と整合しないのである。

勝部家庭園の作庭時期は判らないが、小口・戸田両氏が調査に訪れた（昭和48年頃）庭と不昧が訪れた庭が同じものとは考えられない。残念ながらこれまで勝部家の庭を拝見する機会はなく、これ以上のことは不明である。

出雲文化伝承館で行われた庭園講座でこのような話をしたところ、講座終了後に副館長から「江戸時代にあった勝部家庭園は今ある庭園とは全く別のものです」と声がかかり、後日、絵図と家宅図の写真を送って頂いた。絵図に描かれていたのは建物と広大な庭だけではなく、敷地の四周を水路が巡り、園内の池で舟遊びができるという想像を絶するものだった。

勝部家は永和年間（1615～1624）には現在地に居を構えていたとされ、当主は代々勝部本右衛門と称している。勝部家当主は和歌・書画・茶道を嗜む一流の文化人でもあり、四代・実勝と五代・朝矩（とものり）は池大雅と、六代・尚賢（なおかた）と七代・栄忠（しげただ）は風外本高と交流があった。不昧（生没 1751～1818 年、藩主 1767～1806 年）と同時代の当主は五代・朝矩（不昧より 13 歳年長）と六代・尚賢になる。不昧はたびたび勝部家を訪れ、この屋敷を茂松軒と名付け、茶室・不審庵の建築を指示し、兜形灯籠と濡鷺灯籠を送ったなど多くのエピソードを残している。作庭は不昧お抱え庭師・沢玄丹によるものとされる。

図 5. 勝部家庭園（昭和 48 年頃）

図 6. 茂松軒勝部邸宅之図（明治 13 年）

4. 家宅図からの推察

家宅図が木造建築のモジュールを正確に表現していれば屋敷全体（建物・庭・敷地等）のサイズもおおよそ見当がつくと考えて画像をトレースしてみた。１間＝6 尺 5 寸（約 1970mm）として半間（985mm）のメッシュを家宅図に当て嵌めると部屋割りの線とよく整合する。家宅図の描写はかなり正確であると判断できた。

次は敷地である。当時は１町＝360 尺が長さの基本単位となるので 360 の整数比で家宅図と重なる尺寸法を敷地の大きさとした。結果、東西方向は 450 尺でほぼ一致、水路は 15 尺で描かれている。家宅図は北側が切れているため南北方向は絵図を睨みながらの推測となったが 270～300 尺と判断できた。

図 7. 勝部本右衛門家宅図
（明治 13 年）

図 8. トレース図

推測ついでに現在の写真（Google map）に 450 尺×270 尺のフレームを重ねてみた。六代・尚賢は風外本高のために屋敷の東隣に徳林寺を建てている。徳林寺は明治 13 年の家宅図にも記載があり、明治 32 年の地図では当該地と思しき場所に地図記号（卍）が落ちている。現在は廃寺となっているが現勝部家の東側にある墓地近辺が徳林寺跡と推定した。

450 尺×270 尺のフレームは現地形とも整合している。意外と正解に近いのかもしれない。

図 9. 今市 1/50000 地図
（明治 32 年）

図 10. 敷地推定図
（Google map）

5.　出雲流庭園の地割

家宅図をトレースしながら勝部家庭園と出雲流庭園の地割が共通していることに気づいた。門の真正面に玄関があり、門から玄関までの通路と庭は塀で仕切られ、通路から庭に入るための中門があり、庭は座敷（勝部家では書院）の南西に拡がっている。サイズを推測できる精度は持たないものの家宅図には飛石や竹垣も描かれている。中でも目を惹くのは書院の南に大きく描かれた駕籠石？と、その先にある短冊石？である。短冊石は延段の可能性もあるが、いずれにしても門から書院までの構成は出雲流庭園そのものである。江角家庭園に代表される出雲流の地割（の特徴）は、そのひな形が勝部家庭園にあると判断して良いのではないだろうか。

家宅図が描かく庭に石組の類は見当たらない。本来、石組は庭を構成する要であり飛石を描いて石組を省略することは不自然である。実際に要となるような石組が無かったのか重要視されていなかったのかは不明だが、出雲流庭園（特に出雲流典型）の石組への扱いに通じる気もする。出雲流の庭ではあまり見かけない枯流れが江角家庭園（出雲文化伝承館）にあることも長年の疑問だったのだが（他では本高見家庭園にある）、伝承館の庭は勝部家をイメージして造られた庭である可能性もでてきたように思う。

図 11.　家宅図（部分拡大）

6. 補遺

（勝部本右衛門氏の庭園に就て）

文末に庭園研究誌所蔵と書かれた表記タイトルの一文があり、そこには勝部家庭園は沢玄丹が作庭したものを明治初年に 1/5 に縮小している。以前の庭は池があり池畔に水亭を備えていて水繪園とも称されていたと書かれている。（縮小後の）勝部家庭園については、庭石や石灯籠は昔ながらのまま現存しており不昧公から拝領した兜形灯籠・濡鷺灯籠は徳川時代の石造美術の優秀品である、茶室・不審庵は不昧公親しく指示の下に建築せられたものである、同庵の庭にある手水鉢は昔日、朝鮮より渡来せる寶筐印塔の笠を用いて作られた珍しい形状のものである、池大雅、不昧公、貫名海屋、風外等の愛好したといわれる楊貴妃櫻は尚この庭に残されているとあり、最後、この庭は自然石の天水鉢を庭の主石として構図された稀なものであり、庭園研究の権威龍居松之助氏もいたく推奨しているという一文で結ばれている。

図.12　勝部家庭園（昭和 48 年頃）

「出雲流庭園－歴史と造形」の平面図を加筆修正

（家宅図の書院と上座）

勝部家の大書院は南が庭、北が床の間となっている。座敷西側の上座と記された場所は上段の間と同じ。不昧公など貴人のために設けられた席で、上座の客は東を向いて座ることになる。

一般的な座敷のルールでは主客は床の前を背にして座る。床の間が北なら主客は南向きに座るのだが、出雲では床の間が北にあっても主客の席は西側で東向きに座る。

勝部家に倣ったのか偶然の一致なのかは不明だが、興味深い。

図 13. 家宅図（書院部分のみ拡大）

（木造建築のモジュール）

間（けん）は柱間（はしらま・スパン）の数を表す言葉で長さの単位ではなかった。寺社の大きさを〇間×〇間で表すのはその名残で、出雲大社であれば２間×２間と表記する。床に畳を敷き詰めるようになると畳の寸法が規格化され、それに合わせて柱間寸法も標準化されていく。その基本単位が１間となるが実際の長さは地域によって異なる。明治の度量衡法が１間＝6 尺としたのは関東で主に使われていた寸法だったからで、西日本は１間＝6 尺 3 寸や１間＝6 尺 5 寸とするところが多かった。山陰は１間＝6 尺 5 寸が（かつての）スタンダードである。

（貫名海屋・菘翁　1778～1863）

江戸時代後期の儒学者・書家・文人画家

（風外、風外本高　1779～1847）

江戸時代後期の禅僧（曹洞宗）。画僧

二十二歳の時に勝部尚賢と出会い、勝部家に残されていた池大雅の作品に触れたことが画道大成を決定づけたとされる。風外という名の禅僧・画僧は他にもいるため風外本高は“たこ風外”とも呼ばれる。落款の風の字が“たこ”に似ていたとのこと。